

様式2（第3の6関係）

会議の概要

1 会議名 (審議会等名)	宝塚市エイジフレンドリーシティ行動計画策定委員会 (平成27年度第2回)
2 開催日時	27年8月20日 13:30~15:30
3 開催場所	2-3 会議室
4 出席委員	藤田綾子、溝口由加子、橘田てつ子、木本丈志、多田嘉則、新谷俊廣、戸川進、村上健一
5 公開不可・一部不可の場合の理由	
6 傍聴者数	3人
7 公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可
8 議題及び結果の概要	<p>(1) 議題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動計画の総論の検討について ・各論について ・仕掛け（案）について <p>(2) 審議結果の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回欠席した委員に対し委嘱辞令の交付 ・事務局からの報告として、平成27年8月5日に意見交換会を行ったこと説明し、詳細については次回委員会で報告することとする。 ・行動計画の総論について事務局が素案を提示し、検討を行う。 ・各論の策定要領について事務局より説明を行った。 ・仕掛け（案）について事務局より説明を行った。 <p>(3) 審議における主な意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動計画の総論の検討について <p>(委員) 健康寿命とは、具体的にどういった期間のことなのか。</p> <p>(事務局) 以前の調査で国が健康寿命についての定義をだしている。概要は、日常生活が健康上の問題で制限されることがないとしている。健康寿命の出し方には、バリエーションがあるが、市独自で、健康寿命について調査は行っていない。そういった点を含めて、次回に資料を用意します。</p> <p>(委員長) 健康寿命の定義については、毎年の厚生労働白書に出てくる。そこから引用をしたことを記載すればよいと思う。</p> <p>(委員) 素案の中に出てくる高齢化率や平均寿命の数値の年度が異なっており、比較対照する上で年度の統一をした方がいいのではないか。</p> <p>(事務局) 市独自に毎年調査を行っておらず、宝塚市版の調査データが平成22年に行ったものがある。それぞれの指標について、個別に調査したデータがあるため、年度が統一されていない。今回のご意見を基に、調査データの年度についても検討をしていきたい。</p> <p>(委員長) それぞれの指標について出来る限り最新のデータで記載していただければ良いと思うが、同年度で比較するためにデータの年度</p>

を統一することも必要という意見もある。事務局でいずれかに決めていただければと思う。

(委員)『高齢者と地域社会のニーズのマッチングの仕組み』と『新しい行政課題を「たらい回し」にしない相互支援の体制づくり』の表現が分かりづらいので、文言の変更や説明を加えることは可能か。

(事務局) 見直しを行っている段階であり、今回の議論の中で良い提案があれば、次回の委員会までに検討したい。

(委員長)『新しい行政課題を「たらい回し」にしない相互支援の体制づくり』については、行政内部での話であるならば、たらい回しにしないという消極的な表現ではなく、「各部局が積極的に取り組む」のような前向きな表現を用いれば良いと思う。

(委員) 意見交換会や庁内推進検討会も各部局から職員が出席している。そういった意味では、エイジフレンドリーシティについて全庁的に取り組む姿勢にあると言える。

(事務局) 以前は健康福祉部が高齢者施策をやるという意識が庁内でもあり、全庁的な取組であることを認識する意味でも庁内推進検討会を設置した。意見交換会を開催したところ、参加した職員の中でも市民の方と自分たちとの認識の違いに気づいたという反応も出ている。

(委員長) WHOの書類の中にも、担当部局だけではなく他の部局との横の繋がりをもって高齢者施策に取り組むことが書かれている。市内部でも行政課題に対して、相互に連携を図るための様々な仕掛けがあると思う。その仕掛けの一つとしてエイジフレンドリーシティがあると私は考えています。

(委員)『高齢者と地域社会のニーズのマッチングの仕組み』については、高齢者の知恵や経験が地域社会で必要とされることはあると思う。人材バンクのように高齢者の知恵や経験を活かし、地域社会での問題との間でマッチングを行えばいいと思う。

(委員) 今の表現では、ニーズという言葉が高齢者と地域社会のどちらに係るかによって捉え方が変わってくる。

(事務局) 事務局としては、高齢者のニーズと地域社会をマッチングさせることで、高齢者が支えられる側から支える側にまわるという意味が伝えたかったが、表現を再度検討したいと思う。

(委員) それであれば、『高齢者ニーズと地域社会のマッチングの仕組み』でいいのではないか。

(事務局) 今回の意見を基に検討します。

(委員)「自助・共助・公助の組み合わせで「高齢者にやさしい都市」を目指す」という表現があるが、包括ケアシステムの中で「互助」というのが新しくでてくる。総合計画の中にも互助の考え方がでており、自助・共助・公助に互助を加えるのはどうか。

(委員長)「フレンドリー」の中にはお互いの助け合いという意味も含まれており、互助を加えてもいいと思う。

(委員)「新しいネットワークづくりに向けて、人とお金の流れを変える」の表現が分かりづらく感じる。文言や表現を変えることは可能か。

(委員長)今後新たなネットワークづくりをする上で、行政で発掘した人の提供や助成金のようなもの創設するということか。それでは「変える」という表現が合わないのではないか。

(事務局)全国の自治体でも財政上の都合で新規施策が打てない状況になっている。一方で超高齢社会が進む中で、いかに打開策を打つかが課題となっている。この課題を解決するために起爆剤として、エイジフレンドリーシティの計画があると思っている。

事務局としては、エイジフレンドリーシティの最大の目的は、この「人とお金の流れを変える」ことであると思っている。既存事業には、毎年ある一定の予算がかかっている。時代の流れに合わせて、人員や補助金を含めた市の予算全体の流れを変えられないかと考えている。

(委員)市全体の予算の再編成については理解できるが、文言や表現を修正することで、もっと分かりやすい表現にはできないか。

(委員長)エイジフレンドリーシティの取組が庁内推進検討会を通して、予算配分の変更などの全庁的な動きにすることによって、市民全体にもこの取組が浸透していくと思う。

(事務局)総合計画の後期計画の重点目標として超高齢社会への対応が加わった。その中にエイジフレンドリーシティの取組を入れてもらうことも協議している。エイジフレンドリーシティ行動計画の策定は、平成28年度の総合計画の後期計画のスタートに間に合わないが、平成33年度の総合計画の見直しを見据えてエイジフレンドリーシティ行動計画の実績を作ることで、時代に合わせた人とお金の流れを変えていきたいと考えている。

(委員)「先進国や途上国」や「世界の都市」等の表現が多く出てくるが、これはWHOを意識してのことか。

(事務局)WHOが提唱しているということで、そういった表現になっている。ただし、今後の議論の中で宝塚市を主体とした表現が必要であれば修正をしていこうと考えている。

(委員長)WHOはエイジフレンドリーシティの検証について、8つのトピック84項目のチェックリストに対応して、自己診断することを推奨している。宝塚市でも、チェックリストに応じて、自己診断をしておくべきである。各論部分を作成する上で、8トピック84項目のチェックリストをエッセンスのような形で活用し記載すれば簡潔で分かりやすいと思う。

(委員)「市民アンケートの結果から」との記載があるが、アンケート結果

はどうなっているのか。またアンケートが市民の目線にたったアンケートが実施できているか疑問がある。

(委員長) WHOもチェックには、行政内部での自己評価と市民による評価の2つの視点を考えている。庁内推進検討会で行政内部での自己評価を行い、アンケートによる市民による評価の検証を行う。双方の結果をもって、行政と市民の意識の差について検証を行い、今後の計画策定に活かせれば良いと思う。

また今回のエイジフレンドリーシティ行動計画以外で、宝塚市で高齢者に対してアンケートを実施しているのであれば、その結果も報告いただければと思う。

(事務局) 今回実施したアンケートと過去に市で実施したアンケートについての結果を次回委員会で報告をします。次回委員の方々のご意見を伺った上で、計画の内容を改めて検討したいと考えている。

(委員) エイジフレンドリーシティの取組として、「(1) 都市のハードや社会システムを高齢化に対応させる (2) 市民参画や雇用などで、高齢者が社会に参加し、支える側にまわる」と記載されているが、高齢者が能動的に自立していく上で、「(2) 市民参画や雇用などで、高齢者が社会に参加し、支える側にまわる」ということに軸足を置いて計画を策定していくことが重要だと思う。WHOが推奨する8トピックス84項目のチェックリストを分類すると、(1) (2)の比率はどのくらいになるのか。

(委員長) チェックリストを分類すると、(1) が7割、(2) が3割程度になる。「社会参加」と「市民参加と雇用」は(2)のソフト面に関することが多く、残りの6トピックスは(1)のハード面に関することが多いと感じる。

(委員) 高齢者が能動的に自立していく社会のことを考えれば、チェックリストの中に(2)に関する項目が少なく思う。

(委員長) WHOの書類にも、雇用についてシルバー人材センターのような記述はあるが、いきがい対策ではない労働基準法に則る雇用についての記述はない。計画を策定する上で、(2)の取組を強調していきたいと思うが、(1)に関する項目が多いと、エイジフレンドリーシティの取組が高齢者対策制度のようになってしまう。WHOも概論では、高齢者が支える側にまわることについても記述をしているが、具体的な項目になると高齢者が支えられる側になることの記述が多く感じる。

(事務局) WHOの総論を読むと、(1)と(2)で総括できるとなっている。ただし具体的な各論部分になると、高齢者が支える側にまわることについての記述は少なくなっている。

(委員長) (2)についての項目が少ないのであれば、トピックスの「社会参加」「市民参加と雇用」のチェックリストに項目を付け加えれば良いと思う。

現に健康な高齢者の8割が何かが出来ると考えていると思って

おり、社会参加することで健康寿命が延びることも分かっている。行動計画を策定する上で、宝塚市がオリジナルのチェック項目として、高齢者が支える側にまわるための項目をプラスしていれば良いと考えている。

(委員) シルバー人材センターでは、団塊の世代が全国的に入会していない。入会される方も70歳を越えてから入会している。

今年の4月～6月に入会した方にアンケートを取ると、入会理由の1番が社会参加、2番が健康維持、3番が経済的理由となった。シルバー人材センターに入会することで、友達作りができるという方も多くいる。例えば芦屋市や三田市などでは、同好会やサークル活動が活発で、就労目的ではなく、そういった活動に参加したいという人の入会も多い。特に女性の入会率が、48%と高い。シルバー人材センターでは、家事援助や子どもの一時預かりなど需要が多くなっていることもあり、宝塚市でも女性の入会率を上げること課題となっている。労働条件に制約があるため入会率を上げないと、地域のニーズには応えることが出来ない。

(委員) 例えば児童数の減少など、総論に書かれている内容が、厚生労働白書からの引用したものか、それとも宝塚市独自のものか。

(事務局) 現時点ではデータの収集の問題や時間的なこともあり、全国的なことを中心にかいている。今後は、宝塚市独自のことも書かなければならないと思っている。

(委員) まち・ひと・しごと創生総合戦略にもあるようにバランスが大事である。支える側を増やすことは、少子化対策の取組にも繋がる場所がある。各自治体が有効な対策をいかに取組むかが重要なことであり、それがエイジフレンドリーシティの取組みにもなると思う。

(委員長) 総論については、宝塚市の特徴について記述をしていただきたいと思います。

・各論について

(委員長) 各論については、8トピックスについて宝塚市でチェックし、そこから見えてくる課題を検証し、取組むべきことを検討することが必要だと思う。

(委員) WHOが想定する内容について、現実的に不可能な事例が含まれている。記載すると実現出来ると期待してしまうのではないか。

(事務局) 8トピックスの考え方として、WHOが想定している内容を参考として記載しています。想定している内容を記載した上で、宝塚市での取組を後述している。

(委員長) 参考として記載しても、具体的な内容を記載すると誤解を生む可能性がある。表現方法に工夫をしていただきたい。

・仕掛け（案）について

（委員長）行動計画を策定後に、何か仕掛けがないと行動に移すことが出来ないことがある。高齢者が支える側にまわるための仕掛けとして、社会参加のための情報を整理することも 1 つの案として良いと思う。ただし情報を整理する上で、いかに情報を最新のものにしていくかが管理の上で重要になると思う。

コンセプトの「地域で安心して暮らしてつづけるために」というフレーズに、違和感がある。「安心」が「やさしい」とはならないのではないか。どのようなことが「やさしい」のかを考える必要がある。意見交換会で出た内容からヒントが得られれば良いと思う。次回までに検討をお願いします。

（委員）いきがづくりとして、老人クラブに入会している人は多い。昨月から、老人クラブに入会している人に対して、独自で市内のお店で優待を受けられるカードの発行している。こういった活動を市民全体に広めることが出来れば良いと思う。

閉会